

世界の水分野に関する主要な動向

今村能之*

1. はじめに

筆者は2000～2005年の5年間に亘りUNESCO本部(パリ)内に設置された国連世界水アセスメント計画(WWAP: World Water Assessment Programme)事務局に派遣された。ちょうど、この時期は水分野における日本と世界の関わりが従来のバイ(二国間)中心からバイ+マルチ(多国間)に展開するとともに、世界における日本の影響力及びプレゼンスが増大していった時期でもあった。WWAPでの経験を踏まえ、世界の水分野における主要な取り組みを国連、政府、NGOの3つの軸で整理し、その中でのWWAP及び日本の役割を図-1に示す。国連、政府、NGOは対等なパートナーとして相互に影響、連携し合いながら、世界を動かしている。そして、国連、政府、NGOの3者の連携が深まるとともに、世界的に水分野の重要性が急速に拡大し、それに対して日本とWWAPの演じる役割が増大していることが、この図-1から概観できる。また、水分野における世界の潮流の中で、アジェンダ21が採択された1992年の国連環境開発会議(UNCED)と国際淡水年である2003年に日本で開催された第3回世界水フォーラム(3WWF)は、それまでの流れを大きく変える出来事であった。UNCED以前(～1992年)持続可能な開発に関する世界首脳会議(WSSD)まで(1993年～2002年)、3WWF以降(2003年～)の3時期に分け、世界の潮流とそれに対して日本とWWAPが果たしてきた役割を述べる。

2. UNCED以前(～1992年)

UNCEDにおいて採択されたアジェンダ21には「淡水資源の質および供給の保護」(第18章)の章が設けられ、変革を促した。これは、現在も引き続き取り組まれている統合水資源管理(IWRM)の実践の開始を告げるものであったが、UNCED全体としては、「気候変動枠組み条約」と「生物多様性条約」が署名され、地球温暖化や生物多様性の保全がその後の世界の注目を集めることとなった。

UNCED以前は世界の水問題は主に国連の枠組みで議論され、水問題は多くの環境問題の中の1つという位置づけであった。また、NGOは主体的なプレーヤーでなく、日本の存在感も希薄であった。

3. WSSD以前(1993～2002年)

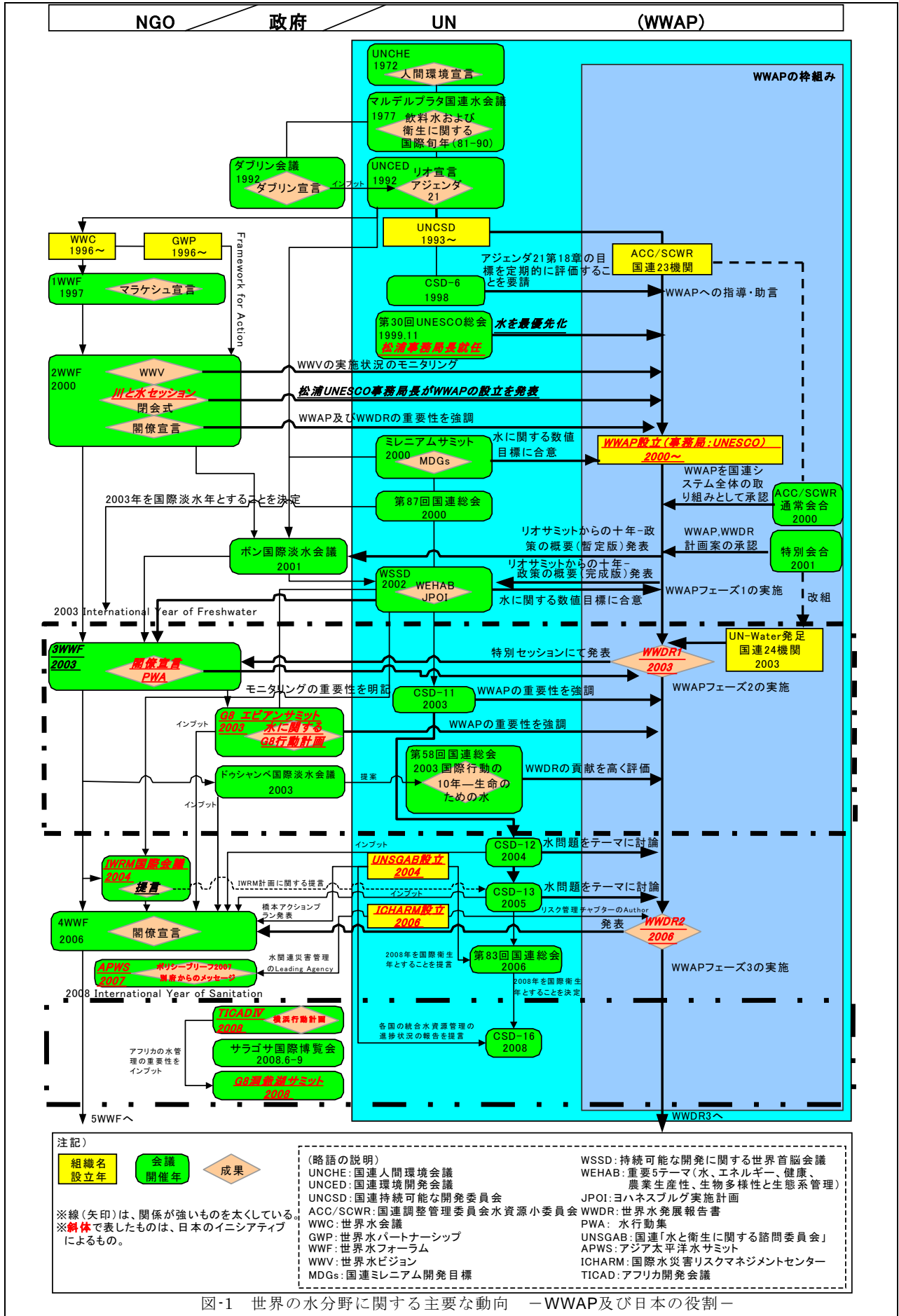
国際的な水関係者間において、水問題が危機的な状況にあるにも関わらず、UNCEDで中心的な課題とならなかった反省から、国連の枠組みを超えた動きが活発化した。国連機関をメンバーとして含みながら、非政府組織との連携も重視する世界水パートナーシップ(GWP)や世界水会議(WWC)などの国際的な組織が1996年に形成され、1997年には第1回世界水フォーラム(1WWF)をモロッコのマラケシュで開催するなど、NGOが次第に重要な役割を演じるようになっていった。一方、国連においても国連持続可能な開発委員会(UN CSD)の下に国連調整管理委員会水資源小委員会(ACC/SCWR)が作られ水関連の国連機関間の調整や緩やかな連携が始まった。しかし、この時期には日本の積極的な関与は顕著でなかった。

この頃の我が国の状況を竹内邦良氏(山梨大学教授(当時))は次のように述べている。我が国はWWCやGWPなどの設立の原動力になったとは言い難く、時代の理念、国際戦略のリーダーシップは、常に欧米先進国の独壇場であり、日本は従順なイエスマンであり、決まったことを実行に移す、信頼できる国でもあるとしている¹⁾。

3.1 WWAP設立と2WWF

1999年に、松浦氏が日本人ではもちろん、アジアからも初のUNESCO事務局長に就任したが、この頃から日本とWWAPにとって大きな変化が生じ始め、翌2000年は日本とWWAPにとって大きな転機の年となった。

世界的な水問題の重要性を認識した松浦UNESCO事務局長が「水」をUNESCOの最優先課題とし、それまでACC/SCWRで議論するばかりで進展の無かった世界水発展報告書(WWDR)の作成活動を具体化するWWAP設立構想を第2回世



注記)

組織名 設立年	会議 開催年	成果
------------	-----------	----

(略語の説明)
 UNCHE: 国連人権環境会議
 UNCED: 国連環境開発会議
 UNCSO: 国連持続可能な開発委員会
 ACC/SCWR: 国連調整管理委員会水資源小委員会
 WWC: 世界水会議
 GWP: 世界水パートナーシップ
 WWF: 世界水フォーラム
 WWV: 世界水ビジョン
 MDGs: 国連ミレニアム開発目標

WSSD: 持続可能な開発に関する世界首脳会議
 WEHAB: 重要5テーマ(水、エネルギー、健康、農業生産性、生物多様性と生態系管理)
 JPOI: ヨハネスブルグ実施計画
 WWDR: 世界水発展報告書
 PWA: 水行動集
 UNSGAB: 国連「水と衛生に関する諮問委員会」
 APWS: アジア太平洋水サミット
 ICHARM: 国際水災害リスクマネジメントセンター
 TICAD: アフリカ開発会議

※線(矢印)は、関係が強いものを太くしている。
 ※斜体で表したものは、日本のイニシアティブによるもの。

図-1 世界の水分野に関する主要な動向 - WWAP及び日本の役割 -

界水フォーラム(2WWF)で表明し、WWAP事務局がパリのUNESCO本部内に設けられ、WWAPの活動が始まった。

日本にとっては、2000年3月にオランダのハーグで開催された2WWFへの政府レベルでの参画が大きな転機となった。オランダ政府は2WWFでの閣僚会議の準備会合への招待状を主要な約20ヶ国の政府と国連機関に出していた。この要請に応え、尾田氏と筆者が準備会合に参加し、主要国や国連機関の動向を把握するとともに、尾田氏は日本政府代表として積極的な発言を行い、日本の存在感を高めた。この結果、議長国であるオランダ政府は、日本政府代表(岸田建設政務次官(当時))が2WWFでの閣僚会議のテーマ別会議「リスク管理(Managing risks)」において日本の河川流域での危機管理への取り組みを紹介することを要請した。さらに、国際流域管理センター、国際流域機関ネットワーク(RIOB)、国際水理学会(IAHR)、Both ENDS(Genderグループ)が開く4つの分科会を束ねる統合セッションとして「川と水セッション」^{2a)}を日本が主体となって開催し、オランダの皇太子オレンジ公や松浦UNESCO事務局長などの参加を得ることとなった。このような日本の積極的な参画は国際社会から大きな評価を受け、WWCから2003年に3WWFを日本で開催して欲しいとの要請があり、日本政府は3WWF開催を受諾することとなった。

2WWFでの我が国の活動を主導した尾田榮章氏(3WWF準備事務局長(当時))らは3WWFの日本開催決定の背景として、川と水委員会の活動が国際社会の中で一定の評価を得たことに加え、何よりも日本に対する期待が大きいことだと述べている^{2b)}。また、2WWFの後、開かれた座談会において、日本の水分野での活動が活発化することに対する期待と問題点が次のように語られている。石井弓夫氏(建設技術研究所取締役社長(当時))はそれまで政府開発援助(ODA)ベースであったり、学会ベースであった活動が、日本政府が本格的に動き出したことで、国際的に日本がステータス、プレゼンスをはっきり打ち出していることを大いに評価し、大きな感動を覚えたとしている。安中徳二氏(日本下水道事業団副理事長(当時))は国際交流のベースになるのは、個人の熱意と力であり、リーダーとして立派な人を得ることは大きな力に

なるとしている。問題点として、多くの日本の企業は今後とも国内でやりたい、そのほうがよほど楽だという気持ちが非常に強いとか、日本は国として民間会社の海外での活動への支援策が消極的だと指摘している^{2c)}。このように2WWFでの日本の取り組みを大いに評価しつつも、3WWFに向けて多くの課題があるとされている。

3WWF開催の受諾後、2000年に3WWF事務局(尾田事務局長)が東京に設立され、政府内では、水関係省庁(国土交通省、厚生労働省、農林水産省、林野庁、経済産業省、環境省)に内閣官房、外務省、文部科学省を加えた協力体制が組まれた。さらに、橋本龍太郎元総理を会長とし、産学官の代表者・著名人をメンバーとする運営委員会による国内支援体制が整えられるとともに、ムハマド・アブザイドWWC会長(当時)と橋本元総理を共同議長とする国際的な3WWF組織委員会も設置された。このような3WWF準備組織のトップであり、3WWFのシンボルとも言える3WWF名誉総裁に皇太子殿下が就任された。

国内外での準備体制が整えられるのと並行して、国連機関、各国政府、NGOなどが3WWFに向けての国際会議や活動を世界各地で繰り広げた。つまり、世界の水に関連する活動が日本で開催される3WWFを目指して動いていったというのが、2003年までの世界の大きな潮流であった。

3.2 WWAPと日本の連携

また、ACC/SCWRにより行われていた国連機関間の緩やかな調整が、WWAP事務局設立及びWWDR作成を中心とするWWAP活動という核を得て、連携が強化されていった。そして、UNCEDのアジェンダ21での水分野の政策目標のフォローアップだけでなく、国連ミレニアム開発目標(MDGs)の水に関する目標といった国際社会の合意された目標のモニタリングを国連機関が要請され、その機能をWWAPが担うようになっていった。このようにWWAPは国連の水分野において中核的な機能を担うようになっていった。

日本とWWAPがそれぞれ国際社会における役割を増していったが、この双方の連携も重要であった。3WWFにおいてWWAPが脚光を浴びることとなったが、これは2003年3月の3WWFの場だけでなく、3WWFに向けた準備活動での連携の成果でもあった。3WWFに向けての準備活動

が始まった頃は、日本は国連の水部門とそれほど強いパイプを持っていなかったが、WWAPの成果物であるWWDRが3WWFで発表されるということにしたことで、ACC/SCWRの会合において3WWFが常に議題となり、ACC/SCWRメンバーは3WWFの重要性を認識することとなった。このような形で図-1の両端にあるNGOでの日本(国際的なNGOの活動である3WWFの開催)とUNのWWAPが連携し、世界全体の水に関する活動を活発にしていっていった。

4. 3WWF及びそれ以降(2003年～)

2000年の第55回国連総会決議により2003年が国際淡水年とされたが、この年の中心的な活動として3月に史上空前の規模(参加国・地域数183、参加者数24,060人)で3WWFが日本(京都、大阪、滋賀)で開催された。

3WWFで脚光を浴びたWWAPは、各国政府の支援が拡大するとともに、ACC/SCWRが改組された国連水関連機関調整委員会(UN-Water)の中核活動(flagship programme)として位置づけられ、2005年に始まった「国際行動の10年：生命のための水」や、UNCED及びWSSDのフォローアップを行う持続可能な開発に関する委員会(CSD)において重要な役割を担うようになった。

一方、3WWFの成功により、水分野における日本のリーダーシップは決定的となり、様々な場面で大きな役割を果たすこととなった。例えば、フランスで開催された主要先進国首脳会合での水に関するG8行動計画の合意にはフランス政府とともに中心的役割を担った。また、3WWFに至る日本の水分野での活動を継続、発展させる組織として2004年に日本水フォーラム(JWF)(会長：森喜朗元総理)が設立され、2008年には日本を議長国とするG8サミットが北海道の洞爺湖で開催され、地球温暖化問題に加え水問題も議論された。

また、2006年のユネスコの国際水災害リスクマネジメントセンター(ICHARM)の設立など、日本がイニシアティブを取る活動が拡大している。

2WWF以前の段階では日本の国際戦略のリーダーシップの不足などを指摘していた竹内教授は、この時期には地球規模での水分野の国際共同研究について、日本の研究者が主導ないし大きな役割を果たしているものが多く、研究界における日本

の存在感は大いに増しているとし、ICHARMなどは世界の注視の的であるとしている。さらに、松浦UNESCO事務局長が水分野をUNESCOの最優先課題にしたこと、3WWFの開催、WWAPへの貢献などにより、我が国の水分野での国際的主導の政策が、外交、開発、環境、研究など、全方的に実行される今日を導いたとしている。

5. おわりに

このように1999年の松浦氏のUNESCO事務局長就任及び2000年のWWAP設立以降、それまで顕著な役割を演じていなかった日本が、急速にプレゼンスを増大させたことがわかる。図-1の左端のNGOの軸では、WWC主催の世界水フォーラムを2003年に史上空前の規模で日本において開催し、右端では日本主導でWWAPを設立し国連システム全体の取り組みとすることにより国連での橋頭堡を築いた。この両端の活動が密接に連携することにより、日本が2003年の国際淡水年、国連、さらにはG8サミットで大きなプレゼンスを示し、さらに水問題への国際的活動の拡大をリードするようになった³⁾⁴⁾⁵⁾。

参考文献

- 1) 竹内邦良：特集：水と国際紛争 期待される日本の役割、FRONT June 1999、pp.34～35、1999
- 2) 世界水ビジョン「川と水」委員会：世界水ビジョン、山海堂、a：pp.3～7、b：p.7、c：p.17、2001
- 3) 今村能之：国連の水問題に関する取り組みの成功諸要因についての考察—国連世界水アセスメント計画(WWAP)とグローバル国際水域評価(GIWA)との比較—、水文・水資源学会誌 Vol. 20、No.5、pp. 400～408、2007
- 4) 今村能之：世界の水問題解決に向けての国連世界水アセスメント計画(WWAP)の役割—国連の取り組みを通じた日本の国際的地位向上を目指して—、水文・水資源学会誌 Vol. 21、No.2、pp.140～157、2008
- 5) 今村能之：世界の水危機と国連の取り組み、国際問題 No521、pp.14～33、2003

今村能之*



国土交通省国土技術政策総合研究所環境研究部河川環境研究室長、博士(工学)
Dr. Yoshiyuki Imamura